

## 基調講演報告書

■テーマ：「福岡・博多の歴史文化～福岡の成り立ち～」

■講師：福岡市博物館学芸主査 鳥巢京一氏

講演の主旨：福岡市は、現在人口 148 万人の都市であり、昭和 4 年の福岡博覧会時の人口が 9 万人であったことを考えると、この 80 年余りに 94%の移入人口があったことが知れる。福岡市民の特徴は、支店都市の特色から「移動型住民」「出稼ぎ型住民」と言われ、人生の最期を福岡で迎える人が多く、代々の歴史をもつ住民は少ない。いわゆる「根無し草の如し」であるゆえ、郷土福岡への愛着や歴史伝統文化についての想いが薄いのが実情である。

しかしながら、福岡市は、古代の官家、中世の商都、近世の城下町、そして近代都市という長く充実した歴史を誇る都市であり、その結果として現代の姿がある。特に、日本の多くの城下町と同様に、福岡市も城下町時代に創られた都市の骨格を継承して、現代の機能配置や道路形態などの都市構造が形成されている。現在のまちを理解し、今後を考える上でも、歴史的視点の重要性は言を俟たない。

そこで、大会開催の前提として、市民、まちづくり団体などを対象とし、福岡・博多の都市と町並みの成り立ちをわかりやすく理解できる内容の講演をいただく。



### 【 序 】

#### ・ 交易都市・博多

まず、江戸時代以前の町並みを景観といい、近代に入ってから町並みを都市景観と区別して話を進めていきます。

福岡の博多（の港）は中国大陸に近く、もともと地形的によい港でした。そのため、古代には大宰府の外港として外交上重要な機能を果たしました。また、中世には、日宋・日朝貿易の拠点として日本の対外交渉上重要な役割を果たし、自治都市でした。宋人も貿易のために博多に移り住み、チャイナタウンが登場します。承天寺、聖福寺などのお寺が開基され、博多の現在につながる通りができます。15 世紀に入ると、博多の富を求めて大内、16 世紀には大友などの戦国大名が進出し、最後に島津が攻めてきたことで博多の町が焼け野原になります。

そこで、1587 年、秀吉が九州平定に来て博多の復興が着手され、太閤町割ができるのです。この太閤町割の特徴は、16 世紀後半まで縦横がはっきりしなかった通りを、四角の街区にまとめて、縦横のラインを設けたことです。現在の博多には、このときにつくられた通りが残っており、1645 年頃の博多の地図に現在の地図をあててみると、あまり変わっていないのが分かります。また、このころの博多は海外にもその名を知られていました。大友宗麟がキリシタン大名であったため、宣教師たちも博多によく寄っていて、本国にその様子を伝えたためです。

太閤町割に関する話として、もう一つおもしろい話があります。博多の総鎮守・櫛田神社がもともとは今の拝殿とは逆を向いていたということです。太閤町割で通りをつくる時に、拝殿を 180 度反転したのです。これは、逆鬼門、全部悪い邪気を櫛田様が吸ってあげようという考えからこうなりました。そして、櫛田神社は、博多の町の総鎮守という地位になっていったと思います。

#### ・ 城下町・福岡

関ヶ原の戦い以降、黒田長政が福岡にやってきましたが、当時の名島城では狭すぎたため新しく城を造ることを計画します。城づくりの場所として候補に挙がったのが、まず箱崎、それから荒津の山（西公園）、住吉神社の周辺、そして現在の場所の 4 地点です。最終的には、四方に延びるということで現在の地に決まりました。

福岡の城下町はどこまでを指すのかと市民の人によく聞かれますので、ここで確認しておきたいと思えます。福岡部と博多部の境にある枅形門から黒門までが最初の福岡城内です。そののち、世の中が平和になって、次男三男が分家し家が増えていくと、新たに町が増えていきました。

## 【本 論】

近代以前の福岡の景観は、序文で述べたようにして形成され、商業都市・博多と城下町・福岡の双子都市となります。それらの町並みを下地として、近代に入り、福岡の町は都市的な景観に変わっていきます。特に特徴としてあげられるのが、劇場都市福岡といわれるように、イベントをするたびに新しい道路をつくり、鉄道を敷設して、福岡の都市を形成していったことです。

### 1 明治 20 年第 5 回九州沖縄 8 県連合共進会と東中洲の市街化

九州沖縄 8 県連合共進会の目的は、政府の殖産興業政策の推進のために九州沖縄 8 県が協力し、産業技術の交流を行い、物産の改良、発達をはかることにありました。

会場の那珂郡春吉村岡新地（現在の東中洲）は、幕末期福岡藩の科学の殿堂となったところでした。主催は、福岡県で、明治 20 年 2 月 10 日から 3 月 31 日までの 50 日間。入場者数は 84 万人余でした（福岡区の人口が 49813 人）。そうして、この第 5 回 8 県連合共進会は、東中洲発展の転機となり、明治 20 年代には、福岡県立福岡測候所、福岡県立福岡工業学校などが創設されます。また、共進会の本館であった共進会は、福岡市会の議事堂にも使われるようになります。このようにして、東中洲の市街化が始まりました。

### 2 明治 43 年第 13 回九州沖縄 8 県連合共進会と天神の市街化のはじまり

#### ① 第 13 回九州沖縄 8 県連合共進会

第 13 回九州沖縄 8 県連合共進会は、明治 43 年 3 月から 5 月までの 60 日間、福岡県主催で開かれました。会場は、福岡城の外堀である肥前堀（旧福岡県庁付近）の埋立地、因幡町（福岡市役所付近）の一部でした。会期中に、各種学会や産業関係の大会などが開催されています。

#### ② 福博電車と共進会

福博電気軌道（市内電車の貫線）の敷設は、わずか 5 ヶ月の突貫工事で医科大学前～西公園間と呉服町～博多駅間が完成し、明治 43 年 3 月 9 日に営業を開始します。この市内電車の開通は、3 月 11 日から始まったこの共進会に間に合って面目を施し、新しい扉を開くことになりました。

中央資本によるこの福博電車（貫線）に対し、地元資本で郡市の接点を循環する博多電気軌道（循環線）が開業しました。博多電気軌道は、天神に「渡辺通り」の地名を残すほど、福博の町に貢献した渡辺与八郎を中心に、明治 43 年 3 月に株式会社として設立されました。この循環線が全線開通したのは、大正 3 年のことでした。博軌電車の開通によって、福岡市と市外の隣接町村とが結ばれ、市街化が大いに進められました。

この両電車の開通は、近代都市福岡の形成の第一歩をしるすこととなります。

#### ③ 福岡市と共進会

福岡市は、明治 43 年の共進会に備えて、道路の新設と拡張を行いました。福岡県知事である寺原長輝は、市内電車の開通式で、祝辞を次のように述べています。

「市内電車の複線化と道路の整備は、福岡の面目を一新した」

このほかに、福岡市の陸の玄関口・博多駅を、西日本一を誇るルネッサンス式のモダンな駅にしたり、西中洲に迎賓館（共進会後は県公会堂。現旧教育庁）を建設したりしました。さらに、この共進会を契機として東中洲には、接待用の一杯飲み屋をはじめ、西洋料理屋などが開業しました。いわゆる東中洲の歓楽街化はここからはじまります。

当時、福岡の人口は、約 84000 人で、共進会入場者数はその 10 倍を超える 914000 人でした。福岡市は 3 年後の大正 2 年には、長崎市について九州第 2 の都市になります。福岡市にとって、この共進会は、九州第一の都市をめざして大きく踏み出すきっかけをつくったイベントであったといえます。

### 3 昭和期における博覧会と天神の市街化

#### ① 昭和 2 年東亜勸業博覧会

東亜勸業博覧会は、昭和 2 年 3 月 25 日から 5 月 23 日までの 60 日間、福岡市主催で行われました。会場は、福岡城の外堀である大濠の埋立地でした。この埋立地は、福岡県の所有で、そのころ福岡に大きな公園は西公園と東公園しかなかったため、もう一つ大きな公園を造ろうと、県立大濠公園の予定地となった場所です。当時の福岡市の人口が 15 万余人であったことを考えるならば、一地方の博覧会としては、まれにみる大盛況であったことがわかります。

この博覧会を契機として、福岡市の西南部耕地整理も進展し、同時に市内電車の城南線（渡辺通 1 丁目～西新聞）が開通し、葉院、警固、六本松、鳥飼方面の発達を促しました。昭和 54 年まで市民の重要な足であった市内電車が、今から 85 年前の昭和 2 年には全線開通していたことは注目すべきことです。

#### ② 博多港修港と昭和 11 年博多築港記念大博覧会

博多築港記念大博覧会は、3 月 25 日から 50 日間、福岡市主催で、福岡海岸の埋立地（現在の長浜周辺）において開催されました。会場内には、本館をはじめ、国防館、軍需工場館、経済更正館などがあり、時代色を反映していました。会期中の入場者数は、160 万人（福岡市の人口は 302,068 人）を記録しました。

この博覧会を契機として、

- 1) 天神町と赤坂電停から会場の長浜埋立地へと通じる道路（通称：博覧会道）を完備
- 2) 博多湾内の防波堤の増築、航路の拡張
- 3) 浚渫した土砂で箱崎浜、須崎浦、西公園下の埋立地の造成

このようにして、一方で博多築港、福岡築港を完成させ、一流の港湾都市としての第一歩を踏み出します。この築港博覧会開催の 3 月を目指して岩田屋がオープンしようとしていましたが、実際は 10 月ごろにオープンします。

### 4 アジア太平洋博覧会と百道地区

市制 100 周年で開催されたのがアジア太平洋博覧会です。このときに、百道浜と地行浜地区を埋め立て、百道浜まで都市高速がのびました。

#### 【結 論】

第一点は、福岡は、武士の町・福岡と商人の町・博多とから成る都市である。

第二点は、共進会・博覧会開催にあたって福岡市は、開催会場のための土地造成、会場までの交通アクセス、港湾の整備、都市景観の整備などをおこなっている。

第三点は、福岡大林区署、福岡郵便局支局、第 7 区土木監督署、地方専売局などの中央官庁の出先機関や、帝国大学の誘致（1910 年）に成功した福岡市は、博覧会や共進会の開催を契機として近代都市化を急速に推し進めることになる。

今後の課題として、これらの福博の歴史をふまえて、福岡の人と博多の人の大きい違いはなんであるかを解き明かしたいと思っています。

両市が互いにライバル視しながら、福岡市を発展させてきた例でいえば、明治 22 年 4 月 1 日に福岡市が誕生しますが、一年後には博多の議員が「福岡市」という名称ではなく「博多市」という名称に変更してくれと建議に上げています。理由としては、「博多」という名前のブランドは博多織や博多人形など全国的に有名である、博多部の方が納税額が多いなどです。このとき議会で採決は、出席議員が 27 名で（議長を含む）、博多市賛成 13 名、反対 13 名で、議長が反対に回ったため福岡市のままでした。ですがもう一度、昭和 3 年に「博多市」への名称変更が建議に上がっています。

このように福岡気質、あるいは博多気質といわれるものに興味を持って調べていますが、この両都市は追い詰められると一緒に行動したりもして、どっちかがいなくてももうまくいかない、両方いてうまくいくというおもしろい都市であります。

（記録作成者：嶋田絵里）



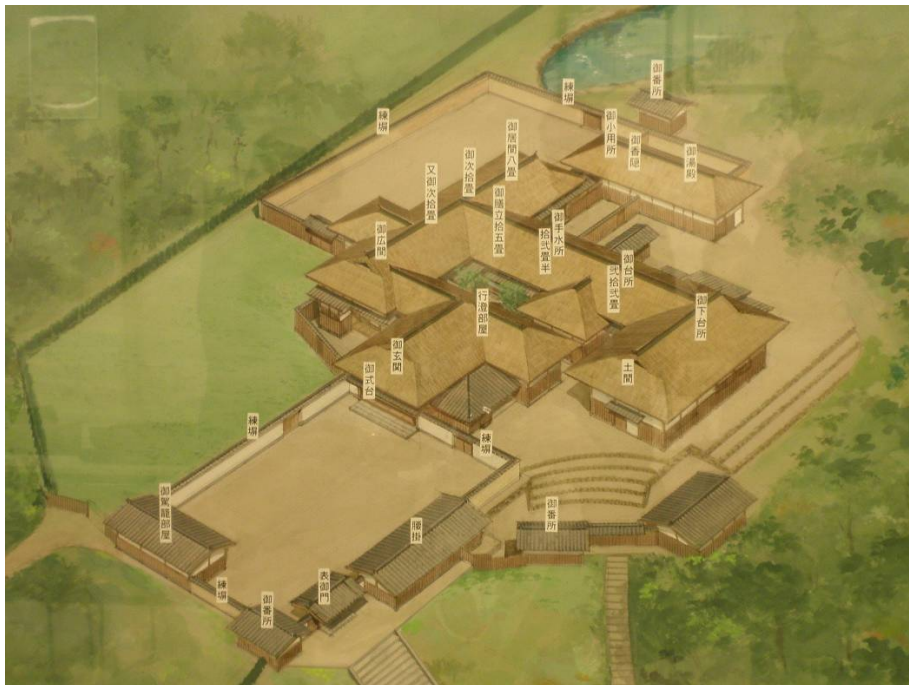
都市圏内文化遺産保存団体からの報告 その1  
唐津街道 赤間宿周辺の町並み

中村哲一郎（赤馬塾 塾長）

こんにちは、赤馬塾の中村でございます。このような大きな場でお話する機会を頂ましたことに感謝いたします。私が住む宗像市は福岡市と北九州市を結ぶ国道3号線の玄界灘を望むほぼ中央にあり、日本書紀、古事記に記述のある天照大神の3人の姫君を祀る宗像大社が鎮座している所です。古来より日本の国造りや、中国、韓国との往来に深く関わった地域でございます、数多くの遺跡や資料が残されています。今、このことなどをふまえ、文化遺産部門での世界遺産の登録を目指しているところです。

赤馬塾の話に入ります。宗像大社から車で十数分内陸部に入った「赤間」という古い地名から取りました。赤間の町のボランティアガイドを行うことからスタートしましたが、学習の中で、佐賀藩の唐津から福岡を通り、北九州へ通ずる唐津街道が参勤交代時の江戸への街道で、ここに筑前二十七宿の一つ赤間宿があり、黒田藩の御用邸「御茶屋」があり、幕末維新の時期に重大な役割を果たした早川勇、五卿の滞在が分かりました。この記念碑が、延長数百メートル程の赤間宿の北にあります。五卿が滞在した「御茶屋」の古図面が九州歴史資料館に保管されている事が分かり、これをもとに、鳥瞰図を作成、さらにさらにジオラマまで作りたいと欲望にかられ、赤間宿の賑わいの分かる、世界遺産ならぬ町並遺産の調査、整理を住民の方々の協力で行いました。これらを、開示、展示でき、なおかつ地域の人や赤間を訪ねてきた人達が宗像赤間の風土歴史を感じられるくつろぎの拠点創りを目指していきます。

この間の勉強の成果の一端を、宗像市内外ひいては県外の方々にも是非関心を持って、観て、聞いていただき、子供達の郷土への関心を喚起し、さらには郷土愛を育み、さらにもっと素晴らしい宗像赤間のまちづくりにと、今年の8月17日から19日の三日間、宗像ユリックスで「大赤間展」を開催します。ぜひ「来ちゃんなっせい」。ありがとうございました。



(写真は「御茶屋」の鳥瞰図です)



都市圏内文化遺産保存団体からの報告 その2  
唐津街道 前原宿と深江宿

有田 和樹（前原 古材の森）

近世の筑前国怡土郡・志摩郡内には、唐津街道沿線上に、志摩郡今宿、志摩郡前原宿、怡土郡深江宿の3つの宿場町が存在した。そのうち、現在の糸島市内にあたる前原宿と深江宿を取り上げる。

前原宿

前原宿は、福岡県糸島市のほぼ中心に位置し、近世は筑前国福岡藩領最西端の宿場町であり、怡土・志摩両郡の中心的な町場として機能した。宿場創設以前は、現地より南約500mの場所（小字名：本村）に数軒の民家がある程度の寒村であったが、街道の整備に伴い、旧前原村の住民を強制的に街道沿いに移して宿場を建設した。宿場の全長は約400mで、近世を通じ戸数は100戸に満たない90戸程度であった。宿場内には、手形改めの関番所が設置され、藩主の別邸である御茶屋、宿代官が駐在する代官所、民間経営の町茶屋などが存在した。江戸後期からは、後背地である農村を相手に大規模な商取引を行う有力な商人も現れ、郡の中心地としての機能を果たしていた。現在、前原宿一带は商業地帯ではあるが、近年どの地域も同じように商業地としては衰退している。しかし、明治期の町家も程よく残されており、宿場町の面影は少なからず残している。



深江宿

一貴山川の河口部に位置する深江宿は、はじめ太閤秀吉の蔵入地であったが、後に唐津領、幕府領、中津領と管轄の藩が移り変わり、唐津街道の宿場町であると同時に、享保二年からは中津領怡土郡24ヶ村の年貢米の集積地で、豊前中津から派遣された代官が駐在する陣屋町でもあった。町並みは鉤形に屈折している。また、宿場の構成は、深江村、深江町、淀川村の三村が複雑に入り組み、海岸周辺は浦町が存在していた。現在、深江宿一带は、商工業地帯というよりは、住宅地となっており、豊臣秀頼誕生を祝い、小早川隆景に命じて寄進した鳥居が存在する深江神社周辺は、白壁が残り、宿場町の面影を残している。また、毎年10月に開催される深江神社の神幸祭では、大名行列のような供揃が町中を練り歩く。



むすび

前原宿の建物構成は、通り全体の戸数が約100戸で、その内8割が店舗、古民家は、全体の2割程度ではない。さらに、昭和40年代に建て替えられたコンクリート造りの店舗やマンション、駐車場などによって宿場町の景観はその大部分が消滅していると言っても過言ではない。深江宿は、全体が住宅地であるため、日々、建て替えが行われている。

しかし、町家は意外に残っているという印象も少なからずあり、表向きは商店の看板に覆われていて実態はわかりにくいものの、看板を全て外すと連続した古い町並が出現する部分もある。だが、古民家の保存・活用に対する積極的な取り組みは行われておらず、家主（権利者）任せであるので、少しずつ開発の波に飲まれているのが現状である。

両地区は、伝統的町並み保存地区や観光名所などにはなり得ないが、「大里から唐津まで続く街道」そして、「かつて宿場町だった」という地域資産がある。この土地が持つ地域性を学習し、理解してもらったうえで、通りにあった店作りを各自が行ってほしいと考えている。そのためにも、イベント等を行う以前に、地元や通りで活動する人たちに対して通りの歴史性を伝えるなど、地域住民の「意識」としての活用が望ましいと考える。

都市圏内文化遺産保存団体からの報告 その3  
長崎街道 筑前六宿 ～街道・宿場遺産の保存と活用～

竹川克幸（アクロス福岡文化誌編纂委員、  
日本経済大学講師）

長崎街道は、小倉・常盤橋（後、門司大里に延長）と天領長崎を結ぶ主要交通路として江戸時代に成立した九州の主要幹線であり、東海道など五街道につぐ脇街道である。全長約57里（1里＝約4km、約228km）の街道沿いに、二十五の宿駅が整備された。このうち現在の福岡県、筑前福岡藩領の「黒崎・木屋瀬（こやのせ）（現北九州市）、飯塚・内野（現飯塚市）、山家（やまえ）・原田（はるだ）（現筑紫野市）」の六つの宿駅（宿場）とその道筋を「筑前六宿（街道）」と呼び、九州諸大名の参勤交代による大行列、文人墨客、商人など多くの旅人が往来し、様々な海外文化・文物・情報の伝播路としても知られている。



江戸時代の初期、慶長16（1611）～17（1612）年にかけて冷水峠（寒水越）の開削冷水峠を挟む山家宿、内野宿が開設されたことが記録でわかる。開通400年の節目にあたり、北九州市・飯塚市・筑紫野市の3市を中心に、旧六宿の地域住民を中心に活動してきた準備委員会を母体に、記念事業の実行委員会（長崎街道筑前六宿開通400年記念事業実行委員会など）を組織し、沿線では様々な記念行事・イベントを開催中、開催予定であり、六宿共通のPRポスターやのぼり旗の作成など広域的な地域連携を図っている。

筑前六宿の歴史的町並みとしては、黒崎宿の曲里の松並木、木屋瀬宿の町並み、飯塚本町～東町商店街や路地裏の寺町、小倉屋や長崎屋など町家が立ち並ぶ内野宿の町並み、貴重な構口跡（県文化財）の残る山家宿の町並みなど、保存状態に差はあるもの、旧宿場町跡の歴史的景観が残る。またそれ以外にも、歴史の道百選にも選ばれた冷水峠の石畳道、直方レトロ地区や鞍手郡小竹、旧伊藤伝右衛門邸のある飯塚市幸袋や同片島・天道・長尾など旧街道沿い（間の宿的な町）に、風情ある古い町並みや歴史的景観が残る

今後は、それら歴史的景観や周辺の史跡・文化財を、地域の歴史・文化の物語や人材、豊かな自然や風土を含めた「街道・宿場遺産」として認識し、価値を高め、広域に観光などの地域資源として活かせるように、保存・活用、観光ガイドや書籍・ホームページなどで記録、情報発信していくべきである。また、先行事例（北九州市の風景街道おもてなしのゆっくり街道など）を参考に、「筑前六宿」のネットワークを拡大し、認知度を高め、重要伝統的建造物群保存・歴史的風致地区や風景街道の認定を目指すなど、歴史的景観の保全・整備はもちろん、かつてのまちの賑わいを取り戻すための道の駅のようなコンベンション（宿泊・休憩）や遊興・娯楽機能や食文化、名物・特産品開発、芸能や祭り、イベント、文化交流など、地域の魅力を高める観光まちづくりや地域ビジネスの仕掛けが肝要である。

- 参考文献 『アクロス福岡文化誌1 街道と宿場町』（海鳥社、2007年）  
『アクロス福岡文化誌5 福岡の町並み』（海鳥社 2011年）  
『九州文化図録選書1 長崎街道筑前六宿』（のぶ工房、2000年）



宮田浩之（小郡市都市計画課）

筑後の町並みは、港町として大川市小保・榎津、商家の町として八女市黒木・八女福島、北川内、久留米市草野、田主丸、うきは市筑後吉井、門前町として久留米市北野、善導寺、武家の町として久留米市寺町、柳川の城下町、街道の町として小郡市松崎、久留米市府中などがある。その中で、黒木・八女福島、筑後吉井は、文化庁「重要伝統的建造物群」の指定を受けている。

松崎宿の成立は、有馬豊範が寛文8年（1669）に御原郡に分知を受け、寛文13年（1673）に松崎館を築いている。松崎藩の設置に伴い、延宝2年（1675）には従来の横隈往還に変わり、府中宿から松崎宿に至る松崎往還を新たな参勤交代道路として、薩摩藩、久留米藩、立花藩、熊本藩等の大名たちがここを通り、貞享元年（1684）に松崎藩は廃止されるが、幕末まで筑後地域における重要な宿場町として繁栄していた。宿場は宿場駕籠・人足・馬が常備され、諸大名が利用する御茶屋の整備も行われ、松崎藩の成立とともに整備したので、宿場町の成立としては新しいが、当初より宿場町を意図した整備である。また、幕末の松崎宿には129軒の家があり、その内26軒が旅籠を営んでいる。出入口にあたる構口の配置や枳形道路の形状等は、宿場町としての典型的なスタイルである。特に、松崎宿は久留米藩の北辺国境の宿場町として位置づけられ、福岡藩に対する北側枳形は入念な構造で造られ、穀留番所等を設置し、久留米藩主が参勤交代で上府・帰国する際には、必ず松崎宿で旅装や容儀を整えたといわれている。

歴史遺産としては、江戸時代の建築の旅籠油屋、一松屋、明治時代の旅籠建築の鶴小屋、三原家土蔵・洋館、宿場の出入口にあたる北・南構口や文化3年（1806）の年号が刻まれている恵比寿さん等が残っている。旅籠油屋は、江戸時代の旅籠建築として形をとどめ、小郡市有形文化財に指定され、修復作業が行われている。北・南構口は、左右とも石垣状で構築され、東海道の宿場の出入口にあった「見附」に倣っている。しかし、現在の都市計画上の区分は市街化調整区域であるため、人口減少に伴い少子高齢化が著しい地区である。そのため、建築物の維持・管理が行われないまま、取り壊されることが多い。

平成3年（1991）の大型台風により旅籠油屋が被害を受けたことを契機に、地元住民による「松崎地区町並み保存会」が組織され、その後、平成19年（2007）地元住民が主体となって『松崎景観御触書』や景観保全の方向性を示した『松崎景観憲章』が策定され、旅籠油屋、三原家洋館では、ジャズコンサート、松崎街道百年ばなしの影絵劇、語り部会や、薩摩街道沿いでは灯明まつりが開催され、歴史遺産を活用した住民主体の景観まちづくりが推進されている。

さらに、平成20年（2008）には、特定非営利活動法人松崎歴史文化遺産保存会が設立され、明治28年（1895）建築の旅籠鶴小屋を中心に、地元の歴史文化遺産を活用した取り組みが行われている。

北構口



旅籠鶴小屋



旅籠油屋にて相川理沙コンサート

